

〔実践報告〕

留学生は交流活動をどのように捉えたか

梶 原 彩 子

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

本稿では、留学生別科の中上級クラスで行った留学生と学部生との交流活動の実践について報告する。この交流活動に対しては、留学生と学部生の満足度は高かったが、筆者と留学生間で評価が違っていた。この違いが生まれた原因を探るために、留学生が教室活動や交流活動をどのように捉えていたのかを分析した。その結果、教室活動には多様な意味づけをしていたのに対して、交流活動はスキルとしての日本語を確認する場、既にある繋がりを確認する場として捉えられており、交流活動を留学生と学部生間の相互理解および人間関係の構築の場とした教師の意図と異なっていたことがわかった。

キーワード：留学生，学部生，交流活動，教師の意図，活動型日本語クラス

How international students perceived exchange activities

Ayako KAJIWARA

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

発行日 2020年10月31日

1. 実践の背景と研究課題

名古屋学院大学留学生別科（以下、別科）では協定校から、交換留学生を中心とした受け入れを行っている。日本語科目の中上級クラスは、アジア圏出身の日本語専攻の留学生が中心となることが多い。彼らの日本語の運用能力には個人差があるが、留学生生活を送る上での大きな困難というのは中上級になるとあまり聞かれなくなる。しかし、筆者は留学生から「学部生と本格的に話す機会があまりない」という声を聞くことがあった。一時的なおしゃべりではなく、軽い話題であっても学部生と深く話してみたい、興味や関心が合う学部生との接点をどこで見つけたらいいのかわからないというような声である¹⁾。

筆者は、このような留学生の問題意識をきっかけとして、留学生と学部生の交流活動の機会を設ける²⁾ことで、留学生と学部生が理解を深め、人間関係の構築に繋げることができるのではないかと考えた。そこで、留学生と学部生の相互理解および人間関係の構築を目的として、留学生が学部生との交流活動を企画・運営するという教室活動を異なる学習者を対象として2学期間行った³⁾。

1学期目は、学期終了後に帰国する留学生と留学経験のある学部生が、お互いの留学体験を共有するという交流活動を実施した。時間的な制約から教師主導で行ったこともあり、自由度が低かったという留学生と学部生からの指摘があった。しかし、話し合いを深化させることができた満足感、留学を経験した者同士が感じられる共感、相互理解の深まりについてのコメントがあり、留学生と学部生双方が交流活動を肯定的に捉えていた様子がうかがえたことから、筆者としても実践の意味を感じた。この課題解消を目的として、2学期目には学習者主導の交流活動を行った。1学期目と同様に留学生と学部生双方の満足感が高かったのだが、筆者にとっては、交流活動が留学生にとって本当に意味のあるものだったのだろうか、という疑問が残る実践となった。

本稿では、このような交流活動に対する評価が筆者と留学生間で異なっていた理由を知るために、2学期目の交流活動の実践が1学期目の課題を解消できたのか、学習者は教室活動や交流活動をどのように捉えていたのかを明らかにすることを研究課題とする。また、各学習者が教室活動や交流活動をどのように意味づけていたのかを見ていきたい。最後に、学習者主体の交流活動の実践から見えた課題についても述べる。

-
- 1) 同様の問題は、先行研究でも多くの指摘がなされている。加賀美（2006a）によると、留学生が日本に留学しても日本人学生との接触の機会がないことに不満を感じている実態があるという。また、同じキャンパスで学んでいても、自然に任されている限り、受け入れ国の学生と留学生の親密な交流というのは進まないという（坪井1999, 加賀美2006a）。
 - 2) 異文化間交流の問題を改善するための取り組みとして、教育的介入（加賀美, 2006b）がある。教育的介入とは「一時的に不可避な異文化接触を設定し、組織と個人を刺激し学生の意識の変容を試みる行為」のことである。
 - 3) 1学期目と2学期目の留学生は異なる。

2. 実践の概要

本実践は、半年前に来日し、別科での学習が2学期目となる中上級の留学生を対象として、2018年度「話す」（全14週）で行った。授業での学習目標は、「身近な体験やエピソードなどについて、他者が理解できるように、理由や根拠を示しながら、順序立てて話すことができる」「聞き手の背景知識、反応に応じて、内容や話し方を調整することができる」と設定した。この学期の留学生は、台湾人2名、韓国人1名の計3名と少人数であったことから、交流活動は1人1回行うこととした。授業スケジュールは、以下の表1の通りである。

表1 授業スケジュール⁴⁾

回	授業内容	回	授業内容
1	オリエンテーション	8	準備・リハーサル
2	読み物	9	交流活動1回目実施
3	ブレインストーミング	10	準備・リハーサル
4	テーマ決め	11	交流活動2回目実施
5	テーマ決め	12	準備・リハーサル
6	企画書の作成・提出	13	交流活動3回目実施
7	準備	14	授業のふりかえり

第1週は、学部生との交流促進、自己理解と他者理解を深めることを目的に、留学生自身がやりたいと考える交流活動をデザインし、実施することを説明した。第2,3週は、留学生の自己理解・学習者間の相互理解を深めながら、留学生が行う交流活動が自分と他者にもたらす効果を意識化することを目的として、読み物を読み、お互いの異文化体験やそれによって身に付いたスキルや姿勢⁵⁾などについて話し合った。

第4,5週は、留学生自身の興味関心分野や価値観を意識化することを目的として、ワークシートを記入、クラスで共有した。ワークシートには、留学生が交流活動のテーマと簡単な内容、良い交流会とは何かを考えることを目的として、留学生の異文化接触の経験を掘り下げるための質問（過去に経験した印象的な出来事、日本留学に関する質問、交流を持ちたい相手、参加したことのあるワークショップなど）を用意した。記入内容の共有の後で、留学生が自身の交流活動をどのような他者の異文化接触の場としたいか、学部生間にどのような影響が出たらいいかを書いてもらった。

4) 第1～5週の授業の始めには、自己や他者の価値観への気づきなどを目的としてゲームを行った。

5) 坂本・堀江・米澤（2017）の「異文化体験を通し獲得されうるスキル、能力、姿勢」（p.10）を引用した。これは、第14週のふりかえりシートにも引用し、第2週の記入結果と交流活動を終えた後の記入結果とを比べてもらった。

第6週には、学内の国際交流スペースの利用に必要な申請書類と企画書、交流活動の案内文を作成した。このスペースは国際センターが管理しており、イベントなどへの使用に申請が必要である。留学生が各自で、自身の交流活動の申請書類と企画書を国際センターに提出し、参加者募集のために学内ポータルサイトへの告知文掲載を依頼した。第7週には、交流活動の具体的な活動内容を決め、実施計画を立てた。交流活動の内容についてクラスで共有し、相互にフィードバックを行った上で、交流活動の評価表⁶⁾を作成した。

第8, 10, 12週は、交流活動の当日の進行や必要な準備、内容の確認のために、リハーサルを行うこととし、時間配分、内容、日本語での指示や説明のわかりにくさなどについて、相互にフィードバックした。第9, 11, 13週に交流活動を実施した。教師は交流活動をビデオ録画⁷⁾し、交流活動に対するコメントシート⁸⁾を学部生から回収した。留学生には自身の交流活動の映像を授業の最終日まで確認しておくように伝えた。第14週には、評価表に沿って自己評価および他者評価をしてもらい、各留学生在が気づいたことや印象に残ったことや感じたこと、交流活動を通じての変化などをふりかえりシートに記入した。

3. 結果

本稿では分析資料として、ワークシート、ふりかえりシート、自己評価・相互評価、教師の授業記録を用いる。これらの記述から、研究課題の検証を行っていく。なお、これらの資料の研究使用については、研究の主旨の説明を行った上で同意を得てある。本稿では、同意の得られた2名の台湾人留学生のチャン（仮名）とリン（仮名）が、どのように交流活動を立案・実施したのか、実施した交流活動をどのように捉えていたのかを見ていく。なお、以下の「」部分は学習者の記述の引用である。

3.1 台湾人留学生チャン

まず、台湾人留学生チャンのテーマ選びと内容の決定、ふりかえりについて見ていく。

3.1.1 チャンはどのように交流活動を立案・実施したのか

チャンは、オリエンテーションの段階で、テーマの選定に困難と不安を感じていたが、「負担だけど、授業だから仕方ない」と交流活動のテーマ選びに取り掛かった。第2週から3週の教室

-
- 6) 3項目3段階の簡易的なルーブリックを作成した。ルーブリックの作成はいくつかの例を提示し、「どんな交流活動になれば、成功したと言えるか」を問いかけた。
- 7) 学部生には、留学生のふりかえり活動以外への利用を行わないこと、コース終了時にデータ消去することを説明した上で、ビデオ撮影の許可をとった。
- 8) 交流活動に対する学部生のコメントシートは筆者が作成した。「参加度」「満足度」「刺激度」という各項目について3段階で評価し、感想・発見・改善点などはコメント欄に記入するようにした。また、学部生の参加姿勢などを知るために、交流活動における「わたしの役割」を記入してもらった。

活動の中で、台湾原住民の言葉や台湾語、台湾で使われている日本語が話題に上がった。また、チャンは、中国語を学習している学部生と接した際に、台湾の中国語のことも言いたいと感じたという自身の経験を話した。

第4週から5週のワークシートでは、チャンは「留学する前うちの大学に日本人の学生とよく付き合っているから、日本にいてもそういうこともできるそうだと思っていた」と期待していたが、実際には期待したほど学部生との人間関係は広がらず、それは「自分もせいがあるかもしれない(笑)」とした。教室で教師や留学生と日本語で話すことはそこまで緊張しなくなったが、学部生になると何を話せばいいのかわからず緊張するため、話すことを負担に感じるという。

そこで、同じ趣味を持つ者同士が集まる交流活動をしたと考えた。筆者もクラスメートもその案を肯定したが、チャンは、授業の活動として自身の趣味(アニメ)を扱うことに抵抗感を示した。また、学部生が集まらない可能性や留学生の企画として学内に告知を行い、国際交流スペースで実施することへの負担感から、この案を選ばなかった。

学部生の日本語には、留学生にとって未知の表現が頻繁に登場することから大変であるという話題がクラスメートの共感を集めた。そこで、学部生と何を話せばいいかわからないというチャン自身の問題と絡めてこの留学生の問題を解消しようとした。それで「今の日本大学生は何がはやっているか(意見交換)、一応考えた(笑)」と次のアイデアを挙げたが、この案に対しては、クラスメートから学部生がただの情報リソースになってしまうという指摘を受けて、チャンはテーマとすることをやめた。最終的に、チャンは交流活動を通して「教科書に書いてないことが知りたい」し、中国語の授業では若者言葉や台湾の中国語表現は扱わないだろうという考えから、中国語に興味のある学部生にもメリットがあると思い、テーマを「若者言葉」に決めた。

また、チャンは、中国語を学ぶ学部生に台湾の中国語のことも言いたいと感じた経験から、台湾の中国語の発音システムを紹介することにした。チャンにとって、教室で行われる毎週のゲームが「いっぱい話した」という体験となり「言葉がいっぱい学べる」と感じたことから、学部生が楽しく学べる要素としてプログラムにゲーム形式のクイズを入れた。交流活動の目的については、台湾人留学生だけでなく、「台湾に関心のある人同士が知り合うきっかけ」「日本人学生や教職員が、台湾の中国語に興味を持つきっかけ」を作ることであった。チャンが企画した内容は、以下表2の通りである。

表2 チャンの企画した交流活動

企画名	内容
台湾の若者ことばを知ろう	参加者同士で若者言葉について考えた後で、企画者が台湾の中国語の発音システムを紹介し、若者言葉のクイズを出題・練習をする。
	目的 (1) 台湾の関心のある人同士が知り合うきっかけを作る。 (2) 日本人学生や教職員が、台湾の中国語に興味を持つきっかけを作る。
	プログラム
	11:00～11:20 日本語の若者言葉についてのふりかえり 11:20～11:30 台湾の中国語の発音システムの紹介 11:30～12:00 台湾の若者言葉についてのクイズ

このようにチャンの交流活動のテーマと内容は決定したが、この交流活動が、チャン自身や学部生にとってどのような異文化接触の場であることを望むかについては、最後まで書かれなかった。評価表の作成では、10名程度の学部生が集まる中でいろいろなことばを聞き、チャンが日本語で若者の言葉が理解できるようになり、学部生も台湾の言葉に対して関心を示し、チャンの話にリアクションをとってくれたら、チャンの交流活動は成功であると言えると考えていた。チャンが作成した評価表を以下の表3に示す。

表3 チャンが作成した評価表

評価	大成功だった！	一応、成功と言える	ちょっと失敗だったかな…
人数	10人来る	6人来る	3人来る…
雰囲気	盛り上がっている	リアクションがある	静かに…
参加者の感想	台湾のことばがおもしろそうだと思っている	ちょっと興味がある	つまらないことだと思っている

3.1.2 チャンは実施した交流活動をどのように捉えていたのか

交流活動では、当日のキャンセルがあり、中国語を学ぶ学部生が予想よりも集まらなかったが、国際交流スペースを利用していた学部生や留学生が参加し、8名の学部生が集まった。学部生からは、実際にチャンが紹介した台湾の若者言葉で書かれたコメントもあり、台湾の言葉を楽しむ覚えることができたという肯定的な感想が書かれていた。全体的に学部生の満足度は高かった。

ふりかえりで、チャンは、自身の交流活動の場は「台湾の留学生／日本語を勉強している人」と「(中国語に関心がある)日本の大学生」との異文化接触の場だったとし、学部生全員が台湾の言葉に興味を持ってくれたと感じていた。チャンは、発表の日本語能力が交流活動の準備を進める中で少しずつ上がったことや、もっとスムーズに考えを日本語で表現したいとし、自身の日本語運用能力に焦点を当ててふりかえった。また、交流活動をデザインするという授業を行った筆者に対して、「みんなの前で発表することが苦手なんだけど、一つの練習のチャンスを与えてくれてありがたいと思います。」と記述した。

チャンは、評価表の「雰囲気」「学部生の感想」については、自身が交流活動時に感じた印象と学部生のコメントシートの記述から、大成功だったと評価した。「人数」は、参加者が10名に満たなかったが8名が集まってくれたことから、一応成功と言えるとして評価した。全体の感想としても、予想したような参加者(中国語を学ぶ学部生)ではなかったが、全員が台湾の言葉に興味を持ってくれたと感じられたことから、一応できたとした。

また、交流活動を通した自身の変化については、チャンは、もともと「コミュニケーション力」「良い聞き手であること」「交渉力」「自信」「ユーモア」を備えていると考えていたが、この交流活動を終えた段階では、「オープンな心」「相互理解・尊重の姿勢」「外国語力」が伸びたと感じていた。特に、教室活動を通して、自身の「創造性」「想像力」に気づけたとした。

3.2 台湾人留学生リン

続いて、台湾人留学生リンのテーマ選びと内容の決定、ふりかえりについて見ていく。

3.2.1 リンはどのように交流活動を立案・実施したのか

リンは、オリエンテーションでは、国でも交流活動のようなイベント企画を行っていたため、交流活動の実施を負担に感じていないとし、交流活動のテーマは「台湾の食文化か食べ物」を扱うとした。第2週から3週の教室活動では、学内の国際交流スペースが英語を重視する雰囲気であることや学部生が期待する異文化体験とはどのようなものかについてクラスメートと話した。また、中国語学習者に台湾の中国語のことも言いたいと感じたというチャンの体験も聞いた。

第4週から5週のワークシートでは、リンは日本の生活ではリラックスして楽しんでいるが、先学期は日本語の授業内容や課題に負担を感じなかったため、この交流活動は自分に負荷をかけるとした。また、リンは現在台湾食への思いが増しているとし、人が集まりやすい「食」という身近な話題を交流活動のテーマに決めた。また、リンは「台湾文化の国民交流者」であり、台湾のことを教師やクラスメートだけでなく、いろんな人に知ってほしいとした。リンは「台湾の代表(準備中)」として、学部生に台湾に興味を持ってもらうために、プログラムには台湾の飲食文化、外食、台湾料理の味見、作り方なども入れた。クラスメートからは、内容が多すぎる、リンが作る料理はニンニクが多く日本人は好まないかもしれないなどの意見が出たが、リンは内容を削らなかった。

交流活動の目的としては、「学部生の台湾の食文化への理解を深める。」「身近なテーマを通して、学部生同士が気軽に国際交流ができる。」のように、食を通じた交流と理解に加えて、「英語に興味がある人だけでなく、異文化に興味がある人が新たな情報を手に入れることができる。」「国際交流スペースの多文化性を示す。」という、英語以外の言語や文化に興味関心を持つ学部生を呼び、国際交流スペースという場が多様であることを示すことも目的とした。リンは自身の交流活動を、「外国人／日本の食べ物しか食べたことがない人」と「台湾人／台湾と日本の食べ物を食べたことがあるこの私」が、食について語る異文化接触の場とし、学部生に「台湾に行ってみたいようになってもらう」影響があるといいとした。リンが企画した内容は、次の表4の通りである。

評価表の作成では、できるだけ多くの学部生（15名程度）に参加してもらい、みんながリンの台湾食の話を通じて盛り上がり、全員に台湾を好きになってもらえたら、リンの交流活動は成功であると言えると考えていた。リンが作成した評価表を以下の表5に示す。

3.2.2 リンは実施した交流活動をどのように捉えていたのか

交流活動では、リンが友人たちに声をかけたこともあり、リンの友人、留学生、国際交流スペースをよく利用する学部生が15名以上の参加があった。学部生からは、リンのおすすめの情報などがあったことが有益な情報だったというコメントもあり、行ってみたくなくなったなどの肯定的な感想が書かれていた。全体的に学部生の満足度は高かった。

リンは、自身の交流活動の場は「台湾食文化／中国語／食べ物に対する感想」と「異国の食文

表4 リンの企画した交流活動

企画名	内容
台湾美食の魅力	企画者のプレゼンの合間に、クイズやディスカッションを交える。台湾の家庭料理も試食する。
	目的 (1) 参加者の台湾の食文化への理解を深める。 (2) 身近なテーマを通して、参加者同士が気軽に国際交流ができる。 (3) 英語に興味がある人だけでなく、異文化に興味がある人が新たな情報を手に入れることができる。 (4) 国際交流スペースの多文化性を示す。
	プログラム 11:00～11:20 自身の食文化についてのふりかえり (トピック:「外食」「朝ごはん」「飲み物」) 11:20～11:40 台湾の飲食習慣の紹介、日本人の台湾食へのイメージ調査結果 11:40～12:00 私のおすすめ台湾食

表5 リンが作成した評価表

評価	大成功だった！	一応、成功と言える	ちょっと失敗だったかな…
人数	15人	7人	3人？
雰囲気	皆さんが盛り上がるようになってくれたら	一部の皆さんが反応してくれたら	反応なし？
参加者の感想	皆さん全員	一部	嫌いになったら怖く思うようになったら

化／英語・日本語／外国人が台湾食べ物に対する感想」「台湾人（私）」との食を通じた異文化接触の場だったとし、学部生は台湾の食を知り、台湾を好きになってもらえたと感じていた。また、リン自身にとっては、友人たちの台湾への関心を確認し、日本語で発表できたとした。一方で、学部生からの肯定的なコメントに対しては、語りが長くなったという自身の気づき、間延びした雰囲気についての教師やクラスメートからのフィードバックに基づいて「本当に発表をつまらなく感じなかったのか？www」と懐疑的に捉えた。発表が長くなったことは反省点としながらも、日本語での発表・やりとりは問題なく行え、そこにユーモアを交えることもできたことから、「スピーキングやご質問への即興対応といった日本語応用力を鍛えられ」充実した時間だったとした。

リンは、評価表の「人数」「雰囲気」「学部生の感想」のすべての項目において、自身が交流活動時に感じた印象と学部生のコメントから大成功だったと評価した。

また、交流活動を通じた自身の変化については、リンは、もともと「コミュニケーション力」「オープンな心」「相互理解・尊重の姿勢」「好奇心」「良い聞き手であること」「柔軟な考えと行動」「交渉力」「創造性」「忍耐力」「省察力」「観察力」「自信」「曖昧さに関する許容」「試行錯誤できる力」「問題発見・解決力」「立ち直る力」「情報収集力」「ユーモア」を備えていると考えていた。交流活動を通して、「違いを楽しむ気持ち」「好奇心」が強まったと感じていた。そして、授業内でのゲームや教室活動を通して、自分の性格や集団の中での役割などに新たに気づき、「自己理解」が深まったと述べた。そして、準備段階や当日の日本語でのやりとりなどから、「ストレス・コントロール」

「感情コントロール」の姿勢や「外国語力」が伸びたと感じていた。

4. 結果から見えてきたこと

ここまで2名の留学生が、本実践において、どのように交流活動を立案・実施したのか、実施した交流活動をどのように捉えていたのかを見てきた。続いて、2学期目の交流活動の実践が1学期目の課題を解消できたのか、学習者は教室活動や交流活動にどのような意味づけをしていたのかを見ていく。

4.1 本実践で1学期目の課題は解消されたのか

1学期目の交流活動の課題は、クラスの人数（10名）や時間的制約から教師主導となっており、留学生の自由度が低かった点であった。本実践では、交流活動のテーマの選定や内容の決定は、留学生同士の話し合いなどの教室活動を通して、基本的には留学生が自己決定した。また、話し合いの中で、チャンが自身とクラスメートの問題意識を重ね合わせたり、「学部生がただの情報リソースになってしまうのではないか」というクラスメートからの問いをきっかけにチャンが内省を深めて考えを変えたりしたことや、リンが話し合いを通して、学内の国際交流スペースの意味づけを考え、交流活動の目的として加えたことなどから、活動の中で、留学生間で相互援助が起き、留学生が互いの学習リソースとなっていたことがうかがえる。

本実践では、クラスメートとの話し合いを通して留学生が自身の交流活動のテーマや内容を自己決定するというプロセスをとったことで、1学期目の交流活動の課題であった教師主導・留学生の自由度の低さは解消されていたと考える。また、話し合いの中で、チャンが自身とクラスメートの問題意識を重ねたり、リンが自身とクラスメートの問題意識を重ね、自身の交流活動の目的を拡大させたりしたように、交流活動の実施に向けた、教室活動が、留学生自身の考えや価値観を他者に伝え、他者と共有する機会となり、共有された価値観が各自の交流活動へと戻されていくような、考えや価値観の循環の場となっていたと考えられる。

4.2 学習者は教室活動や交流活動をどのように捉えていたか

留学生は自身の交流活動に対して、学部生に「(学部生に)台湾を好きになってもらうようにしたい」「私のイベントを成功させたい」のように、明確な目的意識と責任を持っていた。各交流活動案をクラスで共有し、互いにフィードバックを行う機会を設けたことで、留学生にとっての教室は「クラスメートのイベントに役に立った」「他のイベントの内容を意見できる」のようにクラスメートへの貢献を感じる場となっていた。また、話し合いの場が「ちゃんとバカやれる人」「想像力を発揮する人」のように留学生が新しい自己に気づくことができ、自己理解を深める場ともなっていた。そして、その自己理解を基に考えを述べることで「話したことを通じて、またもう一度人はそれぞれ価値観が完全に違うことをわかった」のように他者の価値観を知る場にもなっていた。

一方で、留学生にとっての交流活動の場は、チャンの「みんなの前で発表することが苦手なんだけど、一つの練習のチャンスを与えてくれてありがたいと思います。」という記述からわかるように、練習のチャンスとして教師から与えられた場として捉えられている。また、「発表の能力が少しずつまくなりました。(かな?)」「日本語で発表することはできた!」のように留学生自身のスキルとしての日本語を確認する場であり、「友達のサポートを感じた」のように既にある繋がりを確認する場であった。

ここまで見たように、教室では留学生間で自己理解や他者理解が深まり、教室に対しては多様な意味づけがなされていたのに対して、留学生にとっての交流活動は、教師から与えられた場、スキルとしての日本語を確認する場、既にある繋がりを確認する場であった。筆者の本実践の意図は、交流活動を通して留学生と学部生の相互理解が深まり、人間関係の構築がなされる場とすることであった。このような筆者の実践意図と学習者の教室への意味づけ、交流活動への意味づけのズレが、交流活動が留学生にとって本当に意味のあるものだったのだろうか、という冒頭の筆者の疑問へと繋がっていたのだと言える。

4.3 交流活動に対する学習者の意味づけが限定的だったのはなぜか

ここで、交流活動に対する学習者の意味づけが限定的だった原因について考えてみたい。いずれの交流活動も留学生と学部生にとって満足できるものだったが、実施された交流活動をふりかえると、チャンとリンの交流活動では、留学生の口頭発表に軸を置いた構成であり、もう1名の留学生は、口頭発表の後の話し合いに軸が置かれた構成であった。この構成の違いは、やりとりの焦点を、学部生間もしくは留学生と学部生間のどちらに当てるか、という小さな差である。

しかし、留学生の口頭発表に軸を置いた構成の交流活動では、学部生のほとんどがコメントシートで自分の役割を「聞く人」や「リスナー」と表現し、コメントとしても「楽しく聞けました」のような聴衆としての感想が多く見られた。交流活動の構成が日本語での発表に重点を置くものだったことで、留学生の交流活動に対する意味づけがスキルとしての日本語を軸になされた可能性があると考えられる。また、教室では、各留学生が交流会を成功させるというひとつの目標に向かって、留学生が相互に学習リソースとなりながら教室活動に取り組んでいた。しかし、交流活動では、自分の交流活動を成功させたい留学生と、聴衆としての学部生の間に共通の目標は生まれにくく、新たな人間関係の構築とはならなかったのかもしれない。

5. おわりに

本稿では、自己理解や他者理解を深めることを目的とした教室活動を通して、学習者自身の興味関心分野を掘り下げ、留学生が教室と交流活動に意味づけをし、自分の交流会に目的意識と責任を持って、主体的に交流活動の立案・実施に取り組んでいた様子を見てきた。その様子は、交流活動で留学生と学部生の相互理解が深まり、人間関係の構築がなされる場とすることを狙った筆者の当初の意図とは異なっていたが、留学生は自己理解や他者理解を深め、クラスメートへの

貢献を感じたり、自分の日本語の伸びを実感したり、クラスメートや友人のサポートに感謝して既にある繋がりを確認しながら、交流活動に意味づけを行い、自身の学びを深めていた。

本実践の課題としては、留学生間、留学生と筆者での交流活動像のズレを修正する機会を特に設けなかった点、交流活動の企画者である留学生と学部生間に共通の目標が生まれにくく、当初の狙いであった新たな人間関係の構築とはならなかった点が挙げられる。これらの課題の解消としては、交流が1回きりとならないような工夫、例えば、留学生と学部生が協働して交流活動を企画し、交流活動の立案・実施自体を共通の目標とすることなどが考えられる。これについては、今後の検討課題としたい。

参考文献

- 加賀美常美代（1999）「大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入」,『コミュニティ心理学研究』2:2, pp.131-142.
- 加賀美常美代（2006a）「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか—シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合—」,『異文化間教育』24, pp.75-91.
- 加賀美常美代（2006b）「大学における異文化間コミュニケーション教育と多文化間交流」『日本研究（高麗大学校日本学センター）』6, pp.107-135.
- 坂本利子, 堀江未来, 米澤由香子（2017）『多文化間共修:多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社.
- 坪井健（1999）「留学生と日本人学生の交流教育」,『異文化間教育』13, pp.60-74.